

2022年12月18日 礼拝説教要旨  
詩編講解説教131「幼子のように」  
詩編131：1～3、マタイ18：1～5

詩編第131編にも「都に上る歌」という表題がついておりますように、これは第120編から続く一連の巡礼の歌の一つになります。イメージとしては、巡礼者がいよいよエルサレムに入るといふ場面でしょうか。その時の心境を歌ったものと捉えることができます。巡礼者はエルサレムの神殿で礼拝を献げますが、それは神さまの御前に進み出ることです。神さまの御前に出るわたしたち信仰者の姿勢がここに歌われています。

来週はクリスマスですが、この時期になりますと思い出します。今から27年前、神学校を卒業する時に卒業旅行でエジプト、イスラエルに行きました。その中でベツレヘムにあります主イエスがお生まれになられた場所を記念する「聖誕教会」に行きました。驚いたのはその教会の入り口が壁にぽっかり穴が空いたような簡素なもので、しかも大人が身を屈めないと入れないくらいの小さい入り口だったことです。ガイドの方は、マタイ福音書2章にあります占星術の学者のところ「彼らはひれ伏して幼子を拝み」（2：11）を引用して、神さまと会うときにまず身を屈める姿勢を作るという話をされたことを覚えております。入り口が小さいので否が応でも身を屈めなくては行けないのですが、でもこれは神さまを信じることにとても大切なことを教えていると思います。神さまの御前に出るということは、それだけの畏れを持って、身を屈めるような姿勢で出るということです。

「主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを、わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません」（1節）ここに御前に出るわたしたちの姿勢があります。しかしわたしたちはこれとは正反対の生き方をしているでしょう。心は驕り、目は高くを見て、大き過ぎることごと、及ばぬ驚くべきことを追い求めて生きている。この驕る心、高ぶる目というのは、ほとんど同じ意味ですが、傲慢、自己主張を表します。特に高ぶる目というのは、他者を見下すことです。わたしたちのどんな小さな人間関係でも、いかに自分を大きく見せるか。強く見せるか。そういう思いに駆られる。そのようにして序列を作りたがる風潮があります。上司が部下に対して、先輩が後輩に対して、自分が上だということを主張する。あとを絶たないパワハラ、いじめ。そのようにして他者を見下さない自分が保てないような世の中です。学校でも、職場でも。そうしないと認められる、甘くみられるということでしょうか。それは決して健全な関係とは言えません。

また「大き過ぎることを、わたしの及ばぬ驚くべきことを追い求めません」（1節）の「追い求める」というのは「歩き回る」という意味です。野心に燃え、奔走する、あれこれと顔を出す。いろいろと手広くすることで、自分を大きく見せる。これも傲慢な態度を表します。一人の人ができることは限られていると思いますが、それ以上のことをしようとする。時に若い時はそういう思いが強いかもしれませんが、でも「過ぎたるは及ばざるが如し」と言います。自分の力を過信してはいけません、そうするとどこかに歪みを生じさせるのです。何より、わたしたちが御前に進み出るとは、そういう傲慢が打ち砕かれることです。神さまの前にわたしたちは誰も誇ることはできません。皆同じ赦された罪人です。教会はまさにそういうところだと思えます。年齢、性別、学歴も職業も一切関係ない。神さまの前にわたしたちは同じなのです。皆、罪を赦されて、憐れみを受けた者同士なのです。

そういう神さまの御前にある謙遜を象徴的に表しているのがこの後の幼子のたとえの部分です。「わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように、母の胸にいる幼子のようにします」(2節) まず「魂」(ネフェシュ)という言葉は、人間の持つ神さまとのつながりを持って生きる部分のことです。創世記第2章にある神さまから命の息を吹き入れられて「生きる者となった」(2:7)、その「生きる」の部分に魂(ネフェシュ)が使われています。その魂が沈黙するということは、それまで神さまを忘れ、自分を神にしていた自分が沈黙し、動きを止めることです。この沈黙こそ「幼子のように」ということです。幼子はむしろ落ち着きがなく、動き回っているイメージがあるかもしれませんが、「母の胸にいる幼子のように」とあります。それはお母さんの腕に抱かれて安心している赤ちゃんのことです。赤ちゃんはお母さんの胸が一番安心する。クリスマスには母マリアが幼子イエスを抱く母子像をよく見ると思いますが、それはまさにクリスマスが平安、安心の象徴なのです。魂が沈黙するというのは、その存在そのものが、神さまのつながりの中でこそ落ち着き、平安であることなのです。

注意したいのは、この「幼子」は「乳離れした子」という言葉です。乳離れというのは、3歳くらいでしょうか。ですからこの「幼子」は生まれたての赤ちゃんのことではない。自分で歩いて、何でも自分でしようとする時期です。いろいろな発見をして冒険もする。その中で怖いことに遭遇すると、お母さんのところに逃げて身を守る。母親から離れて自立しようとしているけれども、でもお母さんを慕い求める。これでいいのです。わたしたちは神さまとの関係においてそういう状態なのです。

いつでも神さまのもとに帰れる。その安心、信頼の中でこそ、わたしたちは自分の足で立って主体的に歩むことができるのではないのでしょうか。そういう自立した生き方もまた恵みとして与えられているのです。来週はクリスマスです。主イエスは幼子の姿でお生れになりました。それは何よりも御前に生きる謙遜を自らのお姿でお示しになられたということです。でも同時に、神さまに信頼するからこそ、自立した一人の人間として歩み出すことを可能にします。クリスマスは自分を見つめ直す時です。御前に静まり、自分は御前にどう生きてきたか。これからどう生きるのか。そのことを思いめぐらしながら過ごしていきましょう。